

晩夏

お墓の前に座って
遠くの森の中へと
日が沈むのを眺めていた

僕が居るこの場所は
君にとっては、きっともう
どうでもいいんだろう・・・

長い時間が経ったようにも思える
その中で
残ったものは多くない

数少ない行事
君との花火
晩夏の

小さな花火は
嬉々として明るく燃え上がり
呆気なく消えてゆく

一本
また一本
そしてさらにもう一本

いたたまれなくなって
スケールを縮小してみようと
僕は駆け出してみた

いつでも消えることはできる

消してしまうこともできる

(月は上ったばかり)

死者と語り合う季節が
遠ざかって行こうとしている
また、1年後に——

(2012.8.10)